

第7回 学術セミナー

【日 時】 2013年7月25日(木) 13:00～17:30
7月26日(金) 9:30～16:00

【会 場】 国立オリンピック記念青少年総合センター 101室
(東京都渋谷区)
<http://nyc.niye.go.jp/facilities/d7.html>

【主 催】 N P O法人 言語発達障害研究会

NPO法人言語発達障害研究会 創立30周年記念

第7回 学術セミナー

言語発達障害研究会は1984年に発足し、言語発達障害児者への言語・コミュニケーション支援の方法やプログラムの提案および検討を行ってきました。今回、創立30周年を記念し、第7回学術セミナーを開催します。

【日 時】 2013年7月25日(木) 13:00～17:30
7月26日(金) 9:30～16:00

【会 場】 国立オリンピック記念青少年総合センター 101室
(東京都渋谷区)
<http://nyc.niye.go.jp/facilities/d7.html>

【参加費】 一般:6,000円(事前振り込み5,000円)
会員:5,000円(事前振り込み4,000円)
学生:1,000円(当日参加のみ、事前登録なし)

【主 催】 N P O 法 人 言 語 発 達 障 害 研 究 会

目次

お知らせ	4
会場へのアクセス	5
スケジュール	6

特別講演

2語連鎖（理解）の訓練プログラムと言語形式 小寺富子，伊東由紀	8
------------------------------------	---

招待講演

「音声発信困難」の障害機序について ～小児発達性発語失行から表出性コミュニケーション障害の 背景となる認知機能障害についての一考察～ 川崎聡大	10
--	----

新規開発検査

『ひらがな文字検査 HITSS』 佐竹恒夫，足立さつき，池田泰子，宇佐美慧	12
対人コミュニケーション行動観察フォーマット （FOSCOM）の開発 東川健，宇佐美慧，宇井円，梶縄広輝，古森一美，田中里実	14

学童期～成人期のコミュニケーション生活への支援

- 重度知的障害を伴う自閉症者への日中活動場面
におけるコミュニケーション支援 16
田中里実
- 成人期重症心身障害児への AAC アプローチ 18
知念洋美
- 言語発達障害児・者のコミュニケーションパートナーについて 19
～支援者へのアンケートから見えてきたこと～
大西祐好

一般演題

- 記号形式－指示内容関係の段階 2－2（ふるいわけ）の
児童が音声記号を獲得する過程 20
松田玲奈
- 就学前の LD リスクが疑われるケースへの支援を考える
～2 症例をとおして～ 22
梶縄広輝
- 発達障害情報・支援センターウェブサイトの紹介 24
－言語発達障害の臨床に役立つコンテンツを中心に－
東江浩美

お知らせ

参加者の方々へ

1. 事前登録の方は受付で名札などを受け取ってください。
2. 学生は学生証を呈示の上、1,000 円を納めてください。
3. 会期中は名札をご着用下さい。
4. 言語発達障害研究会会費を未納の方は、年会費受付にて会費を納入してください。

演題発表者の方へ

1. 発表者は発表開始 10 分前に所定の場所に集合願います。
2. 発表時間をお守り下さい。
3. プロジェクターは 1 面のみです。枚数制限はありません。
4. 事前に、プロジェクター使用の方はプロジェクターで試写をしてください。

※もっとも一般的な VGA ケーブルを用意します。Mac やその他特殊な接続ケーブルをご使用の方は VGA アダプターをご用意ください。

司会の方へ

1. 講演開始 10 分前に次司会者席にご着席ください。
2. 各講演が定刻に終了するようご配慮ください。

質疑応答について

1. 司会者の指示に従って、所属と氏名を述べ、簡潔にご発言願います。
2. 質疑応答者は必ず所定の用紙に要旨をご記入の上、受付にお渡しください。

会場へのアクセス

国立オリンピック記念青少年センター 101室

〒151-0052

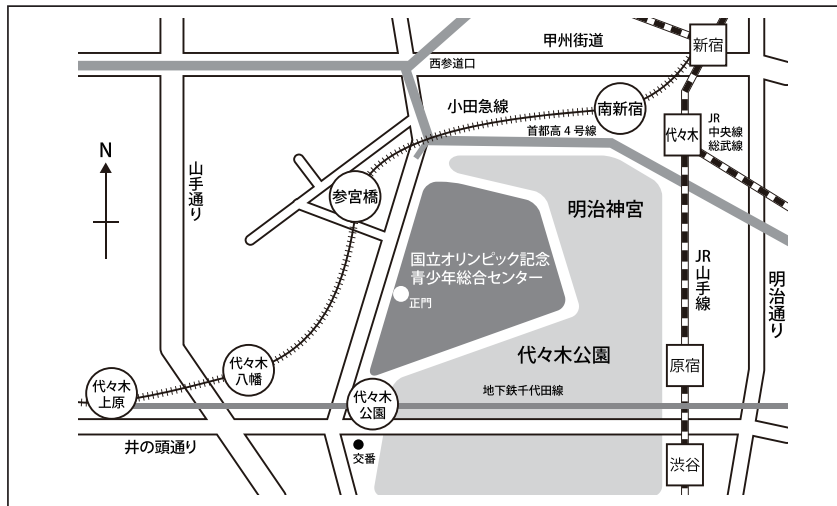
東京都渋谷区代々木神園町3-1

TEL 03-3469-2525

小田急線 参宮橋駅より徒歩7分

■ 参宮橋駅からの道順

- ①参宮橋駅の改札口を出たら左へ進みます。
- ②100mほど歩き、セブンイレブンを過ぎた所にオリンピックセンターの案内板があります。
- ③案内板を左に曲がると踏み切りがあるので渡ったら右に曲がります。
- ④歩道橋があるので上ります。
- ⑤歩道橋を下りて直進するとオリンピックセンター入り口があります。



■ 東京駅から

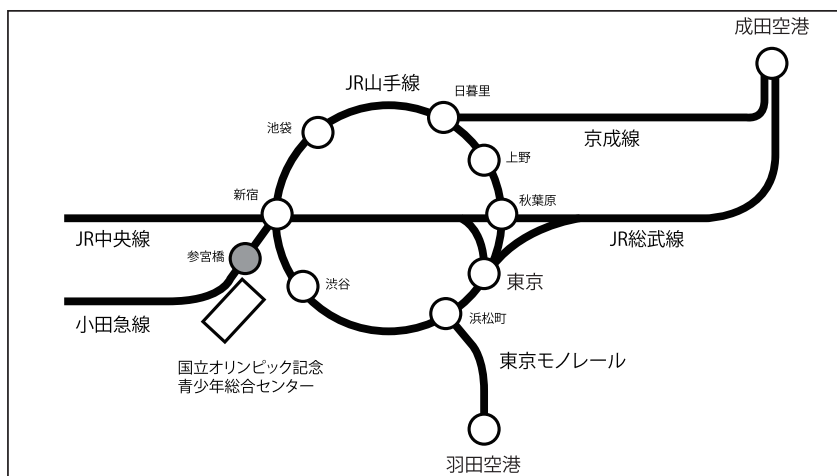
J R中央線 約14分 新宿駅乗り換え、小田急線 各駅停車 約3分 参宮橋駅 下車

■ 羽田空港から

東京モノレール 約23分 浜松町駅乗り換え、J R山手線(外回り) 約23分 新宿駅乗り換え
小田急線 各駅停車 約3分 参宮橋駅 下車

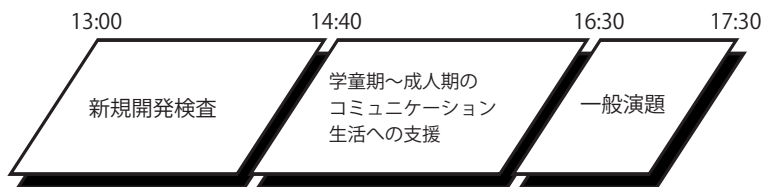
■ 成田空港から

J R総武線 成田エクスプレス 約80~90分、新宿駅乗り換え小田急線 各駅停車 約3分 参宮橋駅 下車



スケジュール

7月25日（木）



12:15～ 受付開始

13:00～14:30 新規開発検査

司会：東江浩美 国立障害者リハビリテーションセンター

『ひらがな文字検査 HITSS』

佐竹恒夫，足立さつき，池田泰子，宇佐美慧

14:40～16:20 学童期～成人期のコミュニケーション生活への支援

司会：本間慎治 （社）発達協会王子クリニック

重度知的障害を伴う自閉症者への日中活動支援

田中里実

成人期重症心身障害児へのAACアプローチ

知念洋美

言語発達障害児・者のコミュニケーションパートナーについて
～支援者へのアンケートから見えてきたこと～

大西祐好

16:30～17:30 一般演題

司会：平野千枝 狭山市青い実学園

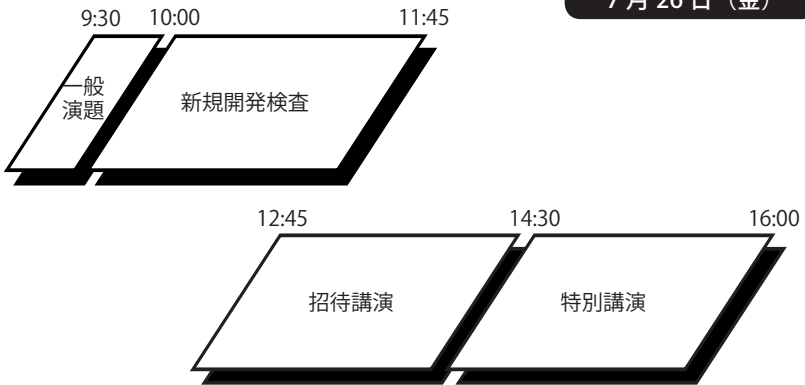
記号形式－指示内容関係の段階2－2（ふるいわけ）の
児童が音声記号を獲得する過程

松田玲奈

就学前のLDリスクが疑われるケースへの支援を考える
～2症例をとおして～

梶縄広輝

7月26日(金)



9:10～ 受付開始

9:30～10:00 一般演題

司会：越 一恵 東京都立光明特別支援学校

発達障害情報・支援センターウェブサイトの紹介
 一言語発達障害の臨床に役立つコンテンツを中心に—
 東江浩美

10:00～11:45 新規開発検査

司会：林 耕司 長野医療衛生専門学校

対人コミュニケーション行動観察フォーマット
 (FOSCOM) の開発
 東川健, 宇佐美慧, 宇井円, 梶縄広輝, 古森一美, 田中里実

12:45～14:15 招待講演

司会：倉井成子 九州保健福祉大学

「音声発信困難」の障害機序について
 ～小児発達性発語失行から表出性コミュニケーション障害の
 背景となる認知機能障害についての一考察～
 川崎聡大

14:30～16:00 特別講演

司会：那須道子 八千代市児童発達支援センター

2語連鎖(理解)の訓練プログラムと言語形式
 小寺富子, 伊東由紀

2 語連鎖（理解）の訓練プログラムと言語形式

小寺富子，伊東由紀*¹

帝京平成大学，*¹ 西東京市こどもの発達センターひいらぎ

2 語連鎖は、統語発達の重要な入口である。2 語連鎖の評価・訓練指導は、現在（2013 年）では、言語臨床の場でルーティンに行われる手続きのひとつになっているのではないだろうか。

意味・統語面に関してほとんど白紙の時代から現場にいた経験から、まずⅠ．2 語連鎖（理解）の訓練プログラムの形成の歴史を個人的にたどり（1970～2012）、現在のプログラムを記述することを行う。次にⅡ．2 語連鎖（理解）の言語形式の習得順序を検討し、動詞文と〈色＋事物〉を比較する。最後にⅢ．最初期の 2 語連鎖の言語形式と教材について提案する。具体的には次のようである。

Ⅰ．プログラムの形成；

試行錯誤を経て（小寺：論文、成書、他）、記号学的な視点を応用した「指示物・指示事態の構成成分の分解・合成（見本合わせ）と、記号形式の分解・合成（含む様式変換）とを主とするプログラム」が作られた。

Ⅱ．2 語連鎖の習得順序；

健常児の横断的データ（〈S－S 法〉検査マニュアル－飯塚他）では、全体では動詞文の理解が〈色＋事物〉より 7～8 月早かった（60% 通過）。1:9～2:11 では 9 割以上が「動詞文が先」であり、「〈色＋事物〉が先」の児はいなかった。

障害児の縦断的データ（佐竹他：言語発達遅滞訓練ガイダンス、小寺：言語発達遅滞の言語治療、他）では、コミュニケーション態度良好群は、9 割が健常児と同様に「動詞文が先」であったが、コミュニケーション態度非良好群は、6 割が「〈色＋事物〉が先」であった。従来の臨床家の印象に関して、データが得られた。

Ⅲ. 最初期の2語連鎖(提案)；

言語形式は、コミュニケーション態度を問わず、a. 興味・親近性、b. 指示物・指示事態の示差性、c. 記号形式の序列性、から、<キャラクター(例. アンパンマン・ドラえもん)+ごはん(を食べる)・はさみ(で切る)>がよい。記号形式の序列性の例を以下に示す。

i / N+N / ; / アンパンマン はさみ / Nは名詞

ii / N+幼+G / ; / アンパンマン チョキチョコキ+身ぶり /

iii / N+成 / ; / アンパンマンが 切る /

教材は、誤反応の修正・正反応の誘導のために、「はめ絵(動作主×動作、動作主、動作)」がよい。

適用に際しては、対象児に応じて、適切な、語彙項目・学習場面・学習量を配慮する。

「音声発信困難」の障害機序について

～小児発達性発語失行から表出性コミュニケーション障害
の背景となる認知機能障害についての一考察～

川崎聡大

富山大学 人間発達科学部

音声発信困難の背景要因について自験例を中心に再検討し、障害機序に応じた指導方法とその効果を検証し、より効率性の高い発信面の指導について検討する。今回、「障害機序」の視点から音声発信困難を再検証することが趣旨である。

国リハ式< S - S 法 > 言語発達遅滞検査のタイプ分類で音声発信困難群 = B 群の定義には、その背景要因として「発達性運動失語、発達性発語失行、表出性言語障害の一部が対応する」(言語発達遅滞検査マニュアル) と示されている。B 群は働きかけのポイント別に B 群 a ~ c の 3 つのサブタイプに分類されるが障害機序や症候別の分類は存在しない。まず症候別障害機序別視点からサブタイプ毎の事例について検討する。現行の B 群 b (口腔運動や構音へのアプローチ) には「小児発達性発語失行」(大伴 1998 他) 等の事例が該当すると推測される。構音運動企画の問題に対しては系統的な構音訓練的アプローチが障害機序からも合致し有効であったと推測される。AAC 適用となる B 群 c (代替コミュニケーション手段) では全般的知的発達の要因や構音運動企画過程に関する障害の重篤度が他のサブタイプと異なると考えられる。文字の導入が有効とされる B 群 a (文字・身ぶり・音声模倣アプローチ) の事例について今回訓練経過を含めて 2 事例供覧する。このサブタイプの中には軽度知的発達遅滞と重篤な音韻情報処理障害を合併した結果、発信面に重篤な障害を呈したと考えられる事例が存在する(2006、2009 既報)。これらの事例では小学校一年次の経過では受信面は段階 5-2 助詞でありながら発信面は単語レベルであり(経過にそって C 群生活年齢に比し遅れ c 受信 > 発信へと移行)、発話は非流暢であった。訓練経過では単語での発信を訓練目標とした際に、系統的構音訓練は効果を認めず文字を導

入し音読経路を用いた機能的再編成法で著効を認めた点も共通していた。B群 a (文字・身ぶり・音声模倣アプローチ) には一見 B群 b (口腔運動や構音へのアプローチ) と症候が近似する事例が存在するが、我々の経験した事例では明らかに障害機序が異なっており、指導方法も工夫を要した。児の指導効果を考慮した際には重要な知見であると考え。今回、受信面と発信面の乖離を生じた要因について我々の事例を再検証し、言語病理学的、神経心理学的知見をもとに障害機序と障害機序に応じた発信面の指導方法について考察する。

最後に、言語表出のプロセスにある意味処理、語彙の選択、音韻の選択配列、統語処理 (文産生の場合)、構音運動記憶の活性化から構音運動の実行といった各モジュールがどのように相互に関与について発達経過や受信プロセスも含めて報告する

『ひらがな文字検査 HITSS』

(HIRAGANA Test for Children Based on Sign-Significate Relations : HITSS)

佐竹恒夫, 足立さつき*¹, 池田泰子*¹, 宇佐美慧*²

言語発達障害研究会,

*¹ 聖隷クリストファー大学リハビリテーション学部 言語聴覚学科*² 日本学術振興会・University of Southern California

ひらがな文字検査(HIRAGANA Test for Children Based on Sign-Significate Relations : HITSS)は、ノーマルデータをもとに、発達レベルで1歳半前後から就学のレディネスが整う6～7歳の子どもの文字能力を、ひらがな文字の前駆体(発達的に先行する事象, precursor)としての視覚的記号から連続的に評価することを目的に作成した。

本検査では、ひらがな文字(絵記号を含む)について、絵記号の理解から文字単語と絵の結合(記号の意味理解)、1音1文字対応、文字文の内容理解、および簡単な文章の読解などについて、就学期前後までに獲得していると考えられる文字能力を包括的に評価する。また、ひらがな文字と関連し習得を支えると考えられる領域として、音韻、文字形弁別に関する課題も含めた。

また本検査の基軸であるひらがな文字・視覚的記号の意味理解は基本的に、国リハ式<S-S法>言語発達遅滞検査の記号形式-指示内容関係の段階構成と評価・訓練プログラムに基づいており、本検査は国リハ式<S-S法>言語発達遅滞検査を中心とする検査バッテリーの中で、文字に関する検査として位置づけられる。

【ひらがな文字検査の特徴】

- (a) 発達年齢では1歳半前後から就学のレディネスが整う6～7歳前後のレベルまでの発達レベルの子どもを対象とする
- (b) ひらがな文字意味理解についての前駆体である絵記号から単語・語連鎖・文章レベルまで段階的に連続的にみることが出来る
- (c) ひらがな文字の「読み」(1音1文字対応・音読)と「書き」(書

字)」を含めることにより、(b) と合わせひらがな文字を包括できる

(d) ひらがな文字と関連しその習得を支える領域の能力(文字形弁別と音韻分解・抽出)も含める

(e) ひらがな文字と関連する領域の習得を包括し一貫して評価できる

(f) 検査結果から、発達年齢とレベルの対応ができ、その後の訓練プログラムの立案に役立てることができる

保健, 福祉, 医療, 教育の分野で, 聴覚や言語発達に障害がある子どもたちに関わる方々が活用できる検査である。

当日は, 概要, ノーマルデータ, 実施方法などについて報告する。

対人コミュニケーション行動観察フォーマット (FOSCOM) の開発

東川 健, 宇佐美慧*¹, 宇井 円*², 梶縄広輝*³,
古森一美*⁴, 田中里実*⁵

横浜市総合リハビリテーションセンター発達支援部

*¹ 日本学術振興会・University of Southern California

*² 旭中央病院診療技術部リハビリ・歯科部門小児科

*³ よこはま港南地域療育センター 診療課

*⁴ 千葉県社会福祉事業団 児童サービスセンター 地域療育支援班

*⁵ 国立障害者リハビリテーションセンター 自立支援局 秩父学園 医務課

【はじめに】

主に就学前の発達障害のある、或いはそのリスクのある子どもの対人・コミュニケーション行動を多面的に観察・評価することは診断やその後に支援を策定する上で重要である。そこで、言語発達検査場面で通常と異なると思われる反応の根拠の明示と共有を目的に、国リハ式< S - S 法 > 言語発達遅滞検査のコミュニケーション態度評価フォームの項目、基準などを改変した対人コミュニケーション行動観察フォーマット (Format of Observation for Social Communication : 以下 FOSCOM) を開発した。FOSCOM は、個別検査場面での子どもの対人コミュニケーション行動観察をするポイントをパッケージ化した評価法である。

本報告では、FOSCOM の内容の紹介を行う。

【FOSCOM の枠組み】

FOSCOM は、3 つの下位領域 A (対人コミュニケーション行動の相互性とプロセス), B (他者への注目・距離・表情変化), C (特徴的なコミュニケーション行動) に分けられる 31 の下位項目で構成される。FOSCOM では、通常と異なると感じられる子どもの行動を、過小・潜在的の観点と過剰・顕在化の観点の 2 つの観点で捉える。要求行動を例に挙げると、要求が少ない、弱い、一貫性がないような場合を過小・潜在的の観点から捉える。他方、要求

が多い、一方的になる、あるいはパニックや問題行動になるような場合を過剰・顕在化の観点から捉える。この2つの観点に基づき、通常期待される反応からの逸脱の程度に応じて、記述し、評点化することで、子どもの行動をよりの確に、かつ体系的に捉えることが可能になる。

【適用対象】

主に就学前の、発達障害のある、或いはそのリスクのある幼児であり、国リハ式＜S－S法＞言語発達遅滞検査（以下、＜S－S法＞）で段階2（事物の基礎概念）以上を対象とする。

【評価手続き】

主に＜S－S法＞施行中に、特定の行動を誘発する働きかけを設定することで、特定の行動（例えば、要求、遊びへの誘いかけに対する反応、うなずきを伴う返事等）を観察し、ローデータとして記録を行う。検査施行後に、FOSCOM記述/評点化フォーム、及びFOSCOMサマリーを記入する。言語発達検査と併行した行動観察のため、FOSCOMによる行動観察のみの時間はほとんど必要としない。行動観察後のFOSCOM記述/評点化フォーム、及びFOSCOMサマリー記入には20～30分必要である。

報告では、FOSCOMの妥当性、信頼性についても述べる。

重度知的障害を伴う自閉症者への日中活動場面 におけるコミュニケーション支援

田中里実

国立障害者リハビリテーションセンター 自立支援局 秩父学園 医務課

【はじめに】

知的障害児入所施設である本学園では、18歳を超えた入所園生は日中活動を行っている。今回、日中活動主担当職員と言語聴覚士が協働して日中活動においてコミュニケーションを中心とした支援を行った経過について報告する。

【対象者】

Aさん(24歳、女性) 診断名：知的障害・自閉症 障害程度区分4 検査結果 PEP-3：コミュニケーション29ヶ月、国リハ式<S-S法>言語発達遅滞検査：段階4-2(3語連鎖1形式) コミュニケーション：ことばでの指示に応じようとすることが多い。発話が全体に不明瞭であり、場面によってコミュニケーションブックなどを使用している。グループでの様子：作業への取り組みは良好である。職員へのことばかけが頻繁であり、使用している写真スケジュールを操作しない様子がある一方、困っていることを伝えられないことがある。コミュニケーションブックは使用せず、予定を確認するような発話など、音声でのパター的なやりとりが多い。

目標①Aさんが伝えたいことを確実に伝達できる手段を獲得する
②Aさんがスケジュールを手がかりにして見通しを持つことができる

【支援内容】

①VOCA (Voice Output Communication Aid) の使用：<第Ⅰ期>VOCAを使用し職員の名前を呼ぶ。<第Ⅱ期>注意喚起後、報告・援助要請を行う。②スケジュール提示：<第Ⅰ期>グループの流れとAさんの作業スケジュールの2つを提示する。<第Ⅱ期>グループ終了時に、翌日に出勤予定の職員写真・スケジュー

ルをセットする。

【結果】

①作業をひとつ終え職員を呼ぶ→職員と関わる、という流れが定着し作業中の職員へのことばかけは一時減少した。また身振りや実物を使った具体的な表出行動が定着する、作業場面以外で職員の肩を叩く注意喚起が見られるようになる、などコミュニケーションの目的が職員側にわかりやすくなった。一方で、一定の時間がかかる作業中に職員に声をかけてほしいという表出として「手伝ってください」という援助要請の VOCA 操作をするなどの行動が出現した。②スケジュールを使用して、次の作業へスムーズに移るようになった。第Ⅱ期に翌日のスケジュールセット後、コミュニケーションブックの予定カレンダーで予定を確認するようになったところ、ことばでの確認が減少した。

【考察】

VOCA を使用した注意喚起の導入後、様々な手段を用いた表出が見られるようになった。VOCA により職員が A さんの表出意図を理解し一貫した対応ができるようになったため、A さんが自分の行動と結果が分かりやすくなり適切な表出に繋がったと考えられる。また、スケジュールを A さんに必要な情報を確実に提示するものとして見直したことにより、見通しを持って活動することが可能になったと考えられる。発表では、小集団でのコミュニケーション支援に関わる中での職員との連携や支援の組み立てについて考察を加える。

成人期重症心身障害児への AAC アプローチ

知念洋美

千葉県千葉リハビリテーションセンター リハビリテーション療法部

医療型障害児入所施設に長期入所する成人期ケースに多職種によるコミュニケーション支援を行った。

対象は 30 歳代の重度四肢麻痺症例で、喉頭気管分離術、気管切開・人工呼吸器管理による音声喪失、弱視を重複する。24 歳時の言語評価では、色名 4 色は理解できるが、絵カードの解読はできず、日常的質問（性別、きょうだいの人数など）に対して選択肢の答えの中から相手の指を握るイエス反応で応答が可能であった。言語理解は 3 歳前後のレベルと推定された。筋力は弱いが、肘関節から遠位の運動が可能で、側臥位でベッドの位置を指さし、同室の友だちや職員を示すことができる。表情で快・不快の感情表現が可能である。当初、VOCA の使用や活動参加度の拡大を目指した働きかけを行ったが、本人のニーズと適合しなかった。そこで限られた相手と室内でコミュニケーションをとりたいという本人の思いに沿って、コミュニケーションの話題を本人がイエス・ノー表現で決められるように、カテゴリー別の語彙リストを作成した。

言語聴覚士、保育士、生活援助員のそれぞれが異なる生活場面で関わり、語彙リストの使用によって会話が効率化し、約 30 分間でやりとりできる話題が 3～4 件となった。また本人の思いを支援者が共感できるほか、要求や依頼内容が実現し、本人の充足度が高まった。

言語発達障害児・者の コミュニケーションパートナーについて ～支援者へのアンケートから見えてきたこと～ 大西祐好

社会福祉法人横浜共生会 地域生活支援センター南海

ガイドヘルパー、ヘルパー（現介護支援員）、放課後等デイサービスの職員、日中一時ケア職員、相談員等へ言語障害児者と関わっている支援者に、支援の中で困っていること、スタッフへの支援が必要なこと、支援者がおこなっている言語発達障害児者とのコミュニケーション上の工夫などに関して、アンケートを実施した。アンケートの結果、支援している児・者のコミュニケーションの実態やコミュニケーションパートナーとしての支援者が困っている点や関わる上で工夫している点など、明らかになったので報告する。また、今後のコミュニケーションパートナーへの必要な支援等について検討したので、報告する。

記憶形式—指示内容関係の段階 2－2（ふるいわけ） の児童が音声記号を獲得する過程

松田玲奈

都立港特別支援学校

小学部 4 年 自閉症

1. 指導開始前の状態

入学時の国リハ式〈S－S 法〉言語発達遅滞検査の結果
段階 2－2（ふるいわけ）

コミュニケーション：周囲の物や人への関心はほとんどなく、
要求行動もほとんど見られなかった。話し言葉・身振り動作による
指示の理解はできなかった。

2. 3 年間の指導の経過

個別学習

〈1 年〉

着席行動が難しかったため、まずは離席せずに学習に取り組む
ことからはじめた。色や形のふるいわけ・選択を中心に学習し、
4 種の具体物や 4 色のふるいわけ・選択ができるようになった。

〈2 年〉

45 分間着席して学習する姿勢が身についた。身近な生活用品
の実物と写真カードのふるいわけができるようになった。16
ピースのパズルができるようになった。

〈3 年〉

身近な生活用品が実物→写真カード→絵カードの順で、音声記
号による指示で選択できるようになった。自分の名前が平仮名で
一文字ずつマッチングできるようになった。32 ピースパズルが
できるようになった。

生活場面

〈1 年〉

手を添えて、教員と一緒に荷物整理や着替えを行った。おおよ
その場所はわかるようになったが、場を離れてしまうことが多

かった。

偏食で給食を食べることができなかった。

〈2年〉

物の置き場所を覚え、自分で荷物整理をすることができた。着替えの手順を覚え、自分で着替えを進めることができるようになった。

〈3年〉

日常生活のおおよその流れがわかり、指差しや身近な名詞は言葉による指示で理解できることが増えた。給食は、全量を自分で完食できるようになった。

就学前のLD リスクが疑われるケースへの 支援を考える

～2症例をとおして～

梶縄広輝

よこはま港南地域療育センター

【はじめに】

文字の学習は、個人差は大きいものの、成長過程の中で自然に進むことが一般的である。小学校に就学をするまでには文字や数字の学習が一定程度できるようにと考える保護者は多く、年長になっても文字の学習が思うように進まず相談に至ることがある。精神遅滞はなく、かつ環境的には文字に触れる機会が十分保障されているのにも関わらず、年長を過ぎても文字学習が進まない状態を学習障害のリスクがあると本報告では位置づけ、年長の2症例をフォローした経過を報告する。

【症例】

症例 A は年長児、診断名は広汎性発達障害、精神発達は田中ビネー V で IQ95、ひらがな文字の読み書きは不可である。

症例 B は年長児、診断名は広汎性発達障害、発達性協調運動障害、精神発達は田中ビネー V で IQ91、読み書きは、読みはひらがなの文章レベルの読解は可だが、書字は不器用さが目立ち、字形が大きく乱れる。

【経過】

症例 A は、保護者が熱心に文字を教えていたが、文字が全く読めないことを主訴に来所となった。家庭で症例にとって困難な学習が繰り返されたことで、症例は学習への苦手意識を既に持つようになっていた。ST 療育では、文字単語と絵の結合課題から、1音1文字対応、文字単語構成課題へなど、症例の段階に合わせた課題を複数設定した結果、徐々にひらがなは清音・濁音レベルで読めるようになった。保護者面談を通して、家庭での取り組みも見直したことで、症例の学習への抵抗感も軽減した状況で、就学を迎えることになった。

症例 B は、発達性協調運動障害と診断されており、粗大運動から微細運動まで困難さが顕著に見られていた。文字においては、読みは文章の読解レベルであるが、書字は視覚や三角などの図形を書くことも困難であった。生活面への困難さもあったことから、医師に加え、作業療法士、臨床心理士など多職種でフォローし、就学をする一般級と通級指導教室へ引き継ぎをするまでに至った。

【まとめ】

いずれの症例とも、文字学習がスムーズに進まない要素（学習障害のリスク）を持ち合わせていたと考えられる。学習障害の場合、精神発達に遅れがないこともあり、努力不足という誤解や不適切な支援を生じさせ、結果として学習への抵抗感など二次的な問題に結びつきやすい。こうしたことは、ひらがな文字の本格的な学習が始まる就学前にも生じる場合がある。

学習障害のリスクがあると思われる就学前の症例に対し、それぞれの施設によってできる支援や形態は異なるとは思いますが、言語聴覚士など専門家ができ得る支援や大切にしたいことなどを報告では検討したい。

発達障害情報・支援センター ウェブサイトの紹介

一言語発達障害の臨床に役立つコンテンツを中心に—
東江浩美

国立障害者リハビリテーションセンター発達障害情報・支援センター

国立障害者リハビリテーションセンターの発達障害情報・支援センター（以下、情報センター）は、発達障害の臨床に関する最新かつ信頼できる情報を収集・分析し普及啓発を行うことを目的に平成20年に開設された。今回は情報センターのウェブサイト <http://www.rehab.go.jp/ddis/> の中から、言語発達障害の臨床に携わる言語聴覚士等支援者にとって役立つコンテンツを紹介し、ニーズにあわせた利用方法を提案したい。

例.

- ◆乳幼児期から成人期に至るまで、ライフステージにわたる支援が知りたい
- ◆保健・医療、福祉、教育、就労などの分野の情報がほしい
- ◆世界の動向、国の施策、自治体での動きを把握したい
- ◆家族支援に役立てたい
- ◆災害時の支援について考えたい

なお、文部科学省では国立特別支援教育総合研究所に発達障害教育情報センター <http://icedd.nise.go.jp/> を設け、教育分野での情報を発信している。あわせてご覧いただきたい。

NPO 法人言語発達障害研究会 創立 30 周年記念

第 7 回 学術セミナー 抄録集

2013 年 5 月 27 日 発行

発行所 NPO 法人 言語発達障害研究会

事務所 千葉県木更津市畑沢 2-36-3

電話・FAX 0438-30-2331

ホームページ <http://lipss.jp/>

